機関拠点型基幹研究プロジェクト
大衆文化の通時的・国際的研究による
新しい日本像の創出

大衆文化研究プロジェクトニューズレター

No. 02 2018

ごあいさつ

このプロジェクトがスタートした背景の一つに、2000年代からの「クール・ジャパン」現象にも顕著な、海外をも巻き込んだ現代日本のマンガ、アニメ、ゲームの流行があげられます。この社会的にも注目される状況に、学術的（批判的）にどう対峙し、歴史的な観点を加味しながら考察しうるのか。こうした問いに応える試みとして、このプロジェクトは立ち上げられました。たとえば、アニメ『妖怪ウォッチ』が大好きな現代の子どもたちに、愛らしい妖怪が登場する近世期の《百鬼夜行絵巻》における時代背景や妖怪の図象が果たす役割、現代の文化的事象との共通点や相違点について、いかに説得力をもって説明できるか。このプロジェクトでは、なかなか難解でもあるこうした問いに、さまざまな研究活動を通して取り組んでいます。

目次

ごあいさつ
活動報告
古代・中世班　伊藤慎吾
近世班　木場貴俊
近代班　古川綾子
現代班　アルバロ
研究紹介
大塚英志
データベース紹介
朴美貞・稲賀繁美
お知らせ

古代・中世班　H30年度共同研究会①レポート

伊藤　慎吾
日文研　客員准教授

研究代表者：荒木　浩　日文研　教授
開催日時：平成30年4月21日（土）、22日（日）
開催場所：国際日本文化研究センター第5共同研究室

大衆文化プロジェクト古代・中世班共同研究「投企する古典性―視覚／大衆／現代」（代表：荒木浩）による平成30年度第1回の研究会では、下記の3つの研究報告が行われた。

4月21日

1）アンダソヴァ・マラル「『古事記』研究におけるミハイル・バフチンの〈対話論〉について」

2）屋良健一郎「近世琉球における和歌の受容と展開」

4月22日

3）岡田圭介「出版社を「編集」すること―「文学通信」の立ち上げと、学術メディアを取りまく状況」

4月21日

まず荒木浩氏によって今年度、来年度の計画説明がなされた。次いでアンダソヴァ・マラル氏の発表が行われた。

1）アンダソヴァ・マラル「『古事記』研究におけるミハイル・バフチンの〈対話論〉について」

本発表は2016年9月に中国上海で開催された第16回国際バフチン学会における口頭発表「バフチンの多声性のコンセプトと日本古代文学」を発展させたものである。

まず『古事記』研究になぜバフチンの〈対話論〉が有意義なのかということを説明した。

ミハイル・バフチンは1929年に『ドフトエフスキーの創作の問題』を出した後、しばらく評価されることがなかったが、60年代に入り注目されるようになった。日本でも60～70年代、バフチンの著書が翻訳されるようになる。これは世界的な流れに乗るもので、文学・思想・哲学・記号学・教育学・言語学など各界に影響を与えることになった。

日本文学研究の中では『源氏物語』研究に最も影響を与え、特に三谷邦明の言説論にそれは色濃く見える。ただし三谷は「一人称的な視点が表出することによる同化、または語り手と登場人物の声の重複による同化」を説くが、しかしバフチンはそれよりも「異なる価値評価がお互いに衝突しながら、常に新たな相互関係を作り出しているという対話」を問題視する。ドフトエフスキーをはじめとする近代小説を主たる分析対象としてきたバフチンは、様々な価値観をもつ個人（作者／語り手／登場人物／読者）の対話を捉えようとしたのに対して、三谷の扱う平安文学は主体性がない。そのために三谷の言説論は語り手／登場人物／読者を〈同化〉する存在として捉えているのではないかと推測する。

バフチンの対話論は、単一的世界として物語を捉えることに対する批判として受け取ることで、『古事記』研究に反映させられると考える。そこで『古事記』における「葦原の中つ国」に関する記述を分析し、西郷信綱や神野志隆光らの研究を検証しつつ、大国主が自らの世界を「葦原の中つ国」と呼んでいないことに着目する。そして別の呼称や「国」「天下」などの分析を通して『古事記』にはいくつもの主観が交差しており、その主観は登場人物のレベルを超え、他のテクストとも交差するという。さらに特権を保持した中心的な世界は存在せず、単一的な意識へと還元されない叙述であり、特権的な視点や、中心的な原理がなく、様々な意識が動的に対立しあう声たちの場となっているとする。

質疑では、神の憑依現象として捉えられている表現を言説論の視点から読む意義、代名詞と人格の問題に対話論がどうかかわるのか、特権的な視点や中心的な原理がなく多声としてあるということと『古事記』編纂の関係、古代や前近代の作品分析でポリフォニーやダイアローグが使われているのか、『古事記』の作者性などについてやりとりが行われた。

2）屋良健一郎「近世琉球における和歌の受容と展開」

近世琉球において、和歌がどのように受容され、展開していったのかという大きな問題を取り上げた。琉球の文学研究は、おもろや琉歌を中心に研究が行われてきた。また組踊や近代の芝居の研究もある。それに対して、和歌の研究はほとんど行われてきていない。和歌は日本本土から渡ってきたものであり、琉球の独自性という点から関心が払われてこなかったからである。本発表はその意義を示すものであった。

琉球の和歌の受容という点からいうと、薩摩との関係がもっとも重要である。しかし、その関係性はもっぱら政治的側面が重視され、文化的側面は重視されることがなかった。和歌研究が本格化したのは1980年代～90年代であり、この間、基礎情報が蓄積されていき、どういう人たちが和歌を作っていたのか、徐々に明らかになっていった。従来の研究は元禄年間と天保年間が

劃期だということで、集中的に行われてきた。そのため、元禄以前や天保までの間は十分に明らかにされていないのが現状である。

本発表では、まず17世紀初期までの琉球人と和歌の概要を捉えた。すなわち古琉球期（～1609年）、島津氏の琉球侵攻（1609年）直後の2つの期間であるが、いずれも史料に乏しいものの、琉球で和歌を嗜む人々が限定的ながらもいたことが確認でき、王族や高官、日本からの移住者を作者として想定されると推測している。

近世期に下ると、史料が充実してくる。発表では和歌を詠む場や和歌習得の在り方を中心に論じた。この時期、琉球人の薩摩上陸、薩摩役人の琉球赴任などによって、和歌に接する機会が増加した。和歌の習得は琉蔵役や在番奉行といった、琉球・薩摩間を往来する人々にとって重要なことであった。そして薩摩藩士を介して中央歌壇との接触を持ち得たという。

最後に、琉球人の和歌の特徴としては、江戸立ちでの作歌、中国での作歌、琉球の地名の使用、琉球方言など珍しい言葉の使用が挙げられるという。

質疑では、琉球の人々が和歌を詠む必要性、琉球人同士の歌会の存在、江戸立ちの時の和歌の特徴、琉球における歌集・歌書の出版事情、書籍の伝来などに関するやりとりが行われた。

3）岡田圭介「出版社を「編集」すること―「文学通信」を立ち上げと、学術メディアを取りまく状況」

本発表は学術書の出版事業に携わってきた出版人として、1996年に笠間書院に入社して以来、独立して今日に至るまでの学術メディアを取りまく状況の推移と今後の諸問題について、発表者自身の経験を交えて論じたものである。

発表者が出版業界に入った1996年は、日本における出版物の売り上げが過去最高の年であった。しかしその後は右肩下がりで、今年は半減してしまった。

出版社の団体としては日本書籍出版業会が老舗であるが、今日、版元ドットコム（1999年立ち上げ）は約260社に及び、大きな勢力となっている。これによって新刊情報などが一発で発信できるようになった。その拡大の背景にはインターネットがある。

現在、出版物はあまり売れなくなった。しかしそうなっても収益があったのは、この間、技術革新があったからだ。たとえば組版用の大きな機材が必要だったものの、1992～3年ころからソフトが作られるようになった。中でもアドビが組版ソフトを作ったのが大きい。また組版を電算写植に出すよりも、安価に本が作れるようになった。DDPと同時に印刷の現場にも技術革新が起こり、CTP（computer to plate）の登場によって価格崩壊が起こった。これによって2000～3000円から450～500円くらいに料金が下がった。出版物が売れなくても、増加した要因になっているのではないかと思われる。

ところで図書館流通センター（TRC）というところがある。その書誌情報作成は120～130人が行っている。ここのデータを2800館（3261館のうち）の公共図書館が利用している。ここのデータは書籍の主題などもわかり、便利である。有料だが便利で誤りも少ない点に特徴がある。これを使うと、他のDBが使えなくなるくらいだ。同時にTRCから本を買うことにもなる。結果、非常な独占状態になる。街の書店がつぶれる理由の一因は、TRCや大手に取られてしまうことがあるのだ。

笠間書院のブログは、開設当時、『国文学　解釈と教材の研究』『国文学　解釈と観賞』があったが、もっとコアの情報を出したいと思って作った。しかしこれらの雑誌はなくなってしまった。ブログを始めた当初は情報の羅列に過ぎなかったが、意味があるかと思い続けてやっていた。最終的に、20000記事以上になっていたし、アクセス数もかなりのものになっていた。一日1000アクセス前後だった。

また、2011年に「見えないものを可視化する」という

コンセプトのもと、大量の論文情報を自動化すべく「俺CiNii」を作った。

雑誌は今、壊滅状態になっている。みな、ネットで見るようになっているからである。雑誌は主要な書店の収入源になっていたが、それができなくたった。書店までの物流もダメージが大きい。書籍の流通コストが上がり、書店が減り、売り場も減り、取次店がピンチとなっている。出版社も、普通に考えて収入が減るだろう。

東日本大震災後、日本の電子書籍の遅れを取り戻す国策が行われた。しかし、「文字もの」はごくわずかで、市場のほとんどがコミックで占められている。

こうした中で、言論は「商売」にできるかが大きな問題となる。ここに聴衆の存在が欠かせないこと、学問の閉鎖性を取り払うことが解決の糸口となるだろうということを述べた。

質疑の中では、国文系の学会の規模や今後の問題、隣接諸学との連携、古典に親しむ環境づくりやさまざまなアイディアの必要性、情報量の増加やグローバル化がかえって視野狭窄をもたらし同じ研究者への依頼の集中することへの危険性、議論する言説空間の構築の在り方、編集者本意の学術系メディア編集の意義、デジタルヒューマニティーズとの関係性など様々な点について議論が交わされた。

活動報告：近世班

近世班　平成29年度研究会③ レポート

木場　貴俊
日文研　プロジェクト研究員

研究代表者：小松　和彦　日文研　所長
開催日時：平成30年3月3日（土）
開催場所：国際日本文化研究センター第3共同研究室

近世班の第3回研究会として、最初にリーダーの小松和彦から出席者に向けて、大衆文化プロジェクトにおける本研究会の位置付けの確認、および今回がこれまで日文研で行われてきた「妖怪文化」に関する共同研究20年を総括・展望するものだという趣旨説明が行われた。その後、国内からの2名の報告者による報告を得た。

報告の廣田龍平（筑波大学人文社会科学研究科　歴史・人類学専攻）「「妖怪文化」を超えて―21世紀妖怪研究の成果と展望」は、存在論的展開を援用した研究視角から行った小松編『進化する妖怪文化研究』（せりか書房、2017）の書評を通じて、これからの妖怪文化研究の展望を述べた。展望として、具体的には①データベースの拡充、②研究対象の展開、③「妖怪」概念の転回が、報告者より提示された。

常光徹「妖怪文化に関する共同研究に参加して」は、最初期の共同研究から参加していた氏から見た共同研究の意義と成果に関するコメントである。①民俗学的妖怪研究の枠を超えた、学際的な妖怪研究のきっかけとなる「場」を作ったこと②データベースの制作・公開③研究者同士のネットワーク構築および若手研究者の発見・育成を、共同研究の重要な意義と成果であることを強調した。

総合討論では、コメンテーターを中心に、各自がこれからどのような「妖怪文化研究」を行っていくのかについて、積極的な意見交換が行われた。最後に小松が、これまでの共同研究を振り返りながら、成果と問題点、そして今後の展望について述べた。

総合討論に参加したコメンテーターは以下の通りである。

香川雅信、佐々木高弘、福原敏男、松村薫子。

活動報告：近代班

国際日本文化研究センター・京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター 共同シンポジウム「浪花節と講談の関係を探る」レポート

古川　綾子
日文研　助教

開催日時：平成30年2月12日（月）
開催場所：国際日本文化研究センター第5共同研究室
主催：国際日本文化研究センター・京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター

本シンポジウムは、平成29年9月に日文研と京都市芸大伝音センターとの間で学術交流協定が締結されたことにより実現したものであり、時田アリソン同センター所長（運営委員会委員）の退任記念を兼ねる同センター主催「軍記語り物週間」（平成30年2月8日～15日）の一部として開催された。

小松和彦所長の挨拶の後、ローマ・サピエンツァ大学マルティデ・マストランジェロ教授による基調講演を皮切りに浪花節（浪曲）・講談を取り巻く研究について多角的な発表・討議を行った。

マストランジェロ教授は、説教節に登場する女性の描かれ方を読み解き、説教節の物語における女性の役割の変遷について講演を行った。時田教授は長年のフィールワークの成果である浪曲演目の分析に基づき、講談に題をとった浪曲の占める割合や傾向を明らかにした。真鍋教授の発表は、従軍浪曲師の誕生や乃木伝はじめ戦争を題材にした数多くの浪曲演目を具体的に挙げながら、国家戦争が語り芸に与えた影響を浮き彫りにした。古川特任助教は日文研が大衆文化プロジェクトのもと取り組んでいる浪曲SPレコードのデジタルアーカイブについて報告した。

また講談師の四代目旭堂南陵氏（大阪芸術大学客員教授）は、明治大正期に講談の演目をわかりやすい物語に変換することで大衆の支持を得て発展した浪曲について、速記本や新聞記事など具体的かつ貴重な資料を提示しながら発表を行った。自身も浪曲の曲師として活躍する北川教授は、譜面のない浪曲の三味線演奏を譜面におこし楽曲分析を行うと同時に、レコード音源を中心に一つの講談演目が何人もの浪曲師の演出を経て浪曲化する事例を挙げ、講談と浪曲の密接な関わりと違いを述べた。最後に細川教授が日系ブラジル人浪曲師の存在と彼らによる偉人伝浪曲の誕生などから、移民社会の中で大衆に支持される語り芸として発展した浪曲の実像を明らかにした。

限られた時間ではあったが活発な議論が展開され、とりわけ旭堂南陵氏は実演家の観点から積極的に意見を述べ、議論の展開に大きな役割を果たした。研究者と実演家のどちらにも刺激に富む、今後の浪曲・講談研究を考察する上でも重要なシンポジウムとなった。

現代班　H29年度共同研究会③レポート

アルバロ・エルナンデス
日文研　プロジェクト研究員

発表者：大塚　英志　日文研　教授
開催日時：平成29年3月17日（土）、18日（日）
開催場所：国際日本文化研究センター第1共同研究室と第3共同研究室

大衆文化プロジェクト現代班共同研究「運動としての大衆文化」（代表：大塚英志）による平成29年度第3回の研究会では、下記の6つの研究報告が行われた。

2月17日

竹村民郎「1950年代ーサークル時代における職場の歴史をつくる運動の位相」

アーロン・ジェロー「理論のコンプレックス―日本映画理論史研究の課題」

石本悠馬「メキシコワークショップ『日本のまんが家と地震の日のことを絵巻アニメにしよう』」

2月18日

川松あかり「語り継ぐ」ことと文化創造運動の間―筑豊旧産炭地域での調査から―」

鈴木洋仁「『協働』という官制用語とニコニコ動画webは社会運動なのか？」

アルバロ・エルナンデス「身体の物語――メキシコプロレス『ルチャリブレ』レスラーヒアリング」

今回は、運動における「現場」と「理論」の双方を対置する構成とした。

1）竹村民郎氏「1950年代ーサークル時代における職場の歴史をつくる運動の位相」

竹村氏は５０年代に行われた「歴史のブーム」において、「サークル」による文化運動、そして労働者による「職場の歴史」を記録する運動とその背景について語った。この運動は、マルクス＝レーニン＝スターリン主義に立脚し、歴史学を中心に労働者や労働組合を主体にした1950年代初頭の「国民のための歴史運動」「国民的歴史学運動」が背景にあったが、竹村氏が語る「職場の歴史」を作る運動は「国民的歴史学運動」などへの批判でもあった。

竹村氏が行なっていた歴史学をめぐる文化運動は、「サークル」の形をとり、当時の学問の世界や政治の界隈と自立性を保ちながら、労働者自身から語られる「生きた歴史」の記録に専念した運動であった。「職場の歴史」を作る運動は学生や労働者を主体に行われたが、労働者が自ら歴史をかくには難しいところがあったと述べた。そのため、ガリ版による印刷での共同作業、会員で書かれた歴史の評価会、お互いで行っていた作

品の批評などの活動も行い、こういった共同作業や人間関係を重視することによって、職場での様々な亀裂（男/女、労働者/インテリ）を乗り越えていく必要があったと述べた。

竹村氏はガリ版印刷について特に語った。ガリ版の発行物には、労働者が共有する職場で生まれた「ラディカルな意味」や「感性」と、学生の持つ歴史学の知識や技術が、共同作業によってつないでいくことになり、ガリ版文化は「職場の歴史」を作る運動にあった様々な亀裂を乗り越えるに重要な役割があったという。報告の中で、「インテリ」と「労働者」の間の亀裂が大きく注目され、議論にも取り上げられた論点だった。そこで、竹村氏は両者の間にあるモチベーション（活動の動機）の差に着目した。

報告の中で、以下の文献とその詳細も紹介された。

1. 職場の歴史をつくる会 編 (1956) ,『職場の歴史』、河出書房
2. 竹村民郎 (1960),「国民と歴史」, 井上清・石母田正・奈良本辰也・竹村民郎共編、『現代史の方法』、三一書房
3. 竹村, 民郎 (2001),「戦後日本における文化運動と歴史意識 ： 職場の歴史・個人の歴史をつくる運動に関連して」京都女子大学現代社会学部『現代社会研究』 2001/11/30- 2-15-29
4. 竹村, 民郎 (2011-2015),『竹村民郎著作集』全5巻 三元社
5. 井上章一編 (2017),『学問をしばるもの』思文閣出版

2）アーロン・ジェロー氏 (Aaron Gerow)「理論のコンプレックス―日本映画理論史研究の課題」

ジェロー氏は日本における映画理論について考察を行った。ジェロー氏の発表は主に以下の論点を中心に行われた。まず日本と西洋の関係において、日本側からの近代化に関する一種の劣等感と同時に、西洋側からの西洋（ヨーロッパ）の中心主義という状況があると述べ、この状況から日本の映画理論における「二重の論点」が成っているとジェロー氏が提唱した。その背景において、日本における「理論」という概念の捉え方、そして「日本」という観念自体の捉え方について考察を行った。

まず、西洋のモダニティに対する劣等感を「理論のコンプレックス」として分析した。ジェロー氏は西洋による理論の独占（西洋では西洋以外の理論は理論として認められない傾向）とオリエンタリズムの問題（日本の場合、日本の独自性を基にした西洋の批判など）を確認した上、日本側においても同じ傾向があると述べた。即ち、日本においては映画理論は映画理論として認めず、批評や思想として認識される傾向が見られる。1910年代の「純映画劇運動」が求めた近代化や「より映画的な映画」などは、理論の下で行われた運動であり、海外の評価を追求した運動であったため「輸出の夢」を見ていたとジェロー氏は評価した。そのため、「理論の素材は海外にある」という前提が初期に作られたという。しかし、ジェロー氏は「理論のコンプレックス」と呼ぶ意識には、「理論」という概念はヨーロッパの中心性が内包されるという不可避的な問題への日本側からの認識もあったとする。

この状況が生み出した日本における「理論」という概念への警戒に続いて、日本における「日本」という言葉に対する姿勢についても語った。寺田寅彦を例に挙げ、「日本映画理論をより日本的」にするというナショナリズムと軍国主義の下での考え方を指摘した。この姿勢は近代的な視野から成立されるという点において、西洋のオリエンタリズムを強調する伝統芸能と異なる。こういった「日本」の強調は、今村太平を含め、映画理論の中に日本の伝統芸能を見出し、最終的に「日本映画理論をより日本的にする」というスタンスから、「日本は映画的である」という提唱に繋がるとジェロー氏が述べた。

このため、日本の映画理論に見る西洋と日本に対する「二重の意識」とその意識が伴う「自己反省」は、今日の映画理論における西洋中心主義への批判と映画の性質の再検討のために参考になるとジェロー氏が強調した。

従って、近年盛んになりつつあるヨーロッパの中心主義研究への批判、そしてメディアの変遷に伴う映画理論の再評価という大きな二つの流れの中に、日本映画理論が参考になる優先的な位置を占めている、というのが本報告の一つの結論であった。即ち、日本における映画理論は常に「自己反省的」であり、一種の「二重の意識」を内包してきたと言えるとジェロー氏は主張した。報告には、カルチュラル・スタディーズの視座、そしてアンドレ・バザンとドゥルーズに対して先行的であったとジェロー氏が評価する日本の映画評論家を紹介した。

3）石本悠馬氏「メキシコワークショップ『日本のまんが家と地震の日のことを絵巻アニメにしよう』」

漫画家の石本氏は2018年2月1日と4日に、現代班が企画したメキシコでの漫画の展示会、シンポジウムと国際集会で構成された総合イベント「Manga Labo 4」の一環として、子供向けのワークショップを行った（イベントの詳細についてはプロジェクト特設サイトで見られる）。メキシコプロジェクトが企画段階中に、2017年9月19日にM7.1の地震がメキシコシティーの近くに発生したため、地震を体験した子供たちと一緒に漫画を描き、地震の経験を語り、共有するワークショップが企画された。このワークショップは同イベントの一環で開催された「大衆文化は「地震」をどう日本で描いたか」という研究者向けの国際集会の内容と連動したものだった。ワークショップ講師であった石本悠馬氏は子供達と共同でストーリを作り、彼らの絵と声を材料にして、web閲覧用「横スクロールアニメ」、2本の動画を完成した。

石本氏は、「災害の記憶とその記録」「ブリーフケア」と言ったアカデミックな流行とは無縁に活動してきたが、結果的には学術の流行の先端にある。ワークショップで、子供らに「地震の記憶」という経験を想起させる場合、どうやって、リスクを管理し、まとめ上げて行くか、その過程は理論化されており、メディア理論研究に関心があるはずの参加者から、その部分に関心が必ずしも集まらなかったのは残念である。

4）川松あかり氏「語り継ぐ」ことと文化創造運動の間―筑豊旧産炭地域での調査から―」

本報告では、川松あかり氏は現在に行っている博士課程の調査と研究テーマについて述べた。本研究は福岡県の筑豊旧産炭地域における「炭鉱という過去の語り継ぎ」に集中し、民俗学、あるいは文化人類学からのアプローチである。川松氏は「語り継ぐ」において、いかに個人が主体になるかという論点に焦点を当て、2016年から行っている本調査では、川松氏本人も「語り継ぐ」の主体になっていく状況を踏まえ、調査における研究者の位置付けについての考察を行った。

研究者が運動の内部に入り込み、あるいは組織することの意味について、「運動としての大衆文化」という主題をめぐる本質的で普遍的な問題提起であり、研究と社会の関わりの中で立ち位置を模索する初々しい苦悩の中にある発表者に対して、フィールドワーク経験者から、好意的な評価が集まった。研究者ではなく実践者・表現者を意識的に加えてきた本研究会にあって、双方をつなぐ議論ともなった。

5）鈴木洋仁氏「『協働』という官制用語とニコニコ動画webは社会運動なのか？」

本報告では鈴木氏はウェブサイトと動画共有プラットフォーム「Niconico」（ニコニコ動画）における「協働」という単語の採用に着目した。鈴木氏は「Niconico」の仕組みを説明し、その固有性には「複数のユーザーらが「協働的」に動画作品を制作する」、即ちいわゆる「CGM（Consumer Generated Media）」であると述べた。その中、「共同」と「協働」の単語を比較し、後者は共通の目的の為に働くという点に重みがおかれており、1920年代から30年代においては社会連帯を目指していた単語という、バックグラウンドを指摘した。さらに戦後においては、行政の用語として「協働」は市民社会や市民運動からの「アウトソーシング」との関連を指摘しながら現代におけるこの用語の意味合いに着目した上、「KADOKAWA」と合併した「Niconico」におけるユーザーの活動成果の使用や「web運動」として「Niconico」の性質の可能性について議論した。

なお、質疑の中で、「協働」が近衛新体制用語の「協同主義」に連なる新体制用語であり、クール・ジャパンの文脈で二次創作などを賛美する際に北米のアニメ研究者であるイアン・コンドリーがキーワードに何故、「協働」の訳語があたえられたのか、「協働」という語の政治性に踏み込むべきだという指摘があった。

6）アルバロ・エルナンデス「身体の物語――メキシコプロレス『ルチャリブレ』レスラーヒアリング」

本報告ではアルバロ氏は2017年1月18日と19日に、メキシコのプロフェショナルレスラーの間に行ったヒアリングについて述べた。ヒアリングには「Fantastica Mania　2017」というイベントのために来日したレスラーや「CMLL」プロレス団体のスタッフの中から5名、そして日本人のレスラー1名が協力した。報告は、インタビューでレスラーたちが強調した「仕事としてのプロレス」が着目され、その中でプロレスの特有である「スポーツの側面」と「ショーの側面」、オーディエンス、会社とメディアとの関係、社会において「ルチャ」（メキシコプロレス）の意味合い、そして特にキャラクター作りの特徴に着目した。

ルチャは、各地域のプロレスの中でも、もっぱら日本のオタク文化に対してなされる、北米の理論研究が好む、いわゆるオーディエンス論やキャラクター論、メディアミックス論といった理論を批判的に検証するための豊かな可能性を持つ実例でありながら、必ずしも研究の対象となっていない大衆文化であるという指摘があった。

＊

今回は、「現場」と「理論」を対置する意図であったが、「理論研究」が「現場」から立ち上がる「理論」と対話できないこと、大衆文化研究の「理論」が無自覚に、大衆文化に対するメタ的な「ハイカルチャー」としてあることが、大衆文化研究の大きな問題があると思われる。大衆文化に運動という視点を導入することは、運動における理論と実践の関係を問題化することであり、言語化されていない理論を発見することである。その意味で、今後の研究の明確な課題となった回であった。

「戦時下のクールジャパン」研究
『大陸』、可東みの助、「翼賛一家」の意味するところ

大塚　英志
日文研　教授（現代班代表）

現代班はその**主たる研究領域の一つを十五年戦争下**に置いている。

それは現在の日本大衆文化に於ける方法や美学の多くが戦時下に形成され、戦後に展開したと考えるからである。少なくとも大衆文化研究において、「現代」を「戦後」から始めることは戦時下の忘却に外ならない。　他方、戦時下、アジア太平洋地域を「大東亜共栄圏」と名付け支配した以上、「外地」と呼ばれた諸地域を日本大衆文化史から消去することは許されないとも考える。この二つのあまりに自明な立場を出発点としない限り、大衆文化研究による新たな日本像など描きようはない。

このような立場から現代班は、**①戦前・戦後の連続性を裏付ける調査研究②東アジアに於ける調査研究**に重きを置いて研究活動を行ってきた。

①については、共同研究会での議論、**現代班資料分科会**での戦時下・戦後の映画人のインタビューテープ（牧野守氏提供）の文字化、分析を行う一方、昨年、アニメ「鉄腕アトム」の初期構想に戦時下の記録映画の技法を手塚治虫が導入しようとしていたことを裏付ける脚本を発掘するなどの副次的成果も挙げている（図１）。

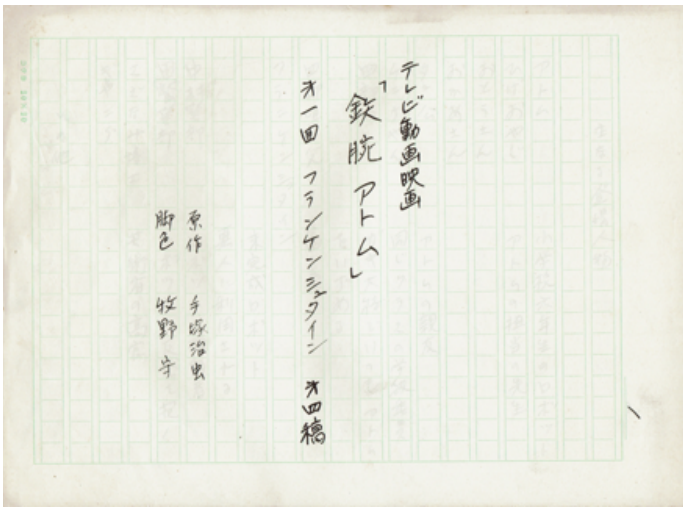

図１　牧野守による「鉄腕アトム」第一回脚本

②については、**現代班東アジア分科会**を中心に、

・アジア初の長編アニメーションであり、戦時下で日本でも公開、手塚治虫自身がその影響を認めている『鉄扇公主』に関わる当時の新聞記事の収集と日本語訳

・戦時下の中国に於ける日本語新聞、雑誌を大衆文化史の視点から調査

を進めてきた。

図２　「早稲田文学」2017年初夏号
特集　戦時下上海の総合雑誌『大陸』再発見：特集扉

②の活動の過程で、**コアメンバーの秦剛**（北京外語大）が、**戦時下の日本語総合雑誌『大陸』の一部を発見**、井伏鱒二、佐藤春雄らの全集未収録作品が多数収録されていることが判明した。秦及び大塚の編集協力という形で二号に渡って『早稲田文学』で特集が組まれ（図２）、また、多くの新聞記事でも報じられたことは、記憶に新しい。雑誌『大陸』の発見は、無論、近代文学史に関わるもので、大衆文化研究に直接関与する成果ではないが、**戦時下の上海で枢軸国のまんが家によるまんが家協会を結成するなど、中国に於けるまんがの宣伝工作に深く関わった幻のまんが家・河東みの助**の文章（図３）も掲載されており、現代班の立場からも注目されるものだ。また、**『大陸』掲載の小説等には東**

アジアや南方に於ける映画や舞踏など大衆メディアによる宣伝工作の姿が記録されており、大衆文化研究の資料となり得る文章も少なくない。文芸誌などを大衆文化研究の資料としてどう読むのか、新たなアプローチが可能と思われる。

図3　可東みの助「漫画宣伝苦話」(『大陸』1945年5月号)

また、現在、精査中だが、河東みの助が編集に関わった、**上海刊行の大衆娯楽雑誌**の存在も確認できており、また、**上海における陸軍・東宝の映画工作に関わる一次資料群**も発掘した。(図4)これらを通じて、戦時下、中国に於けるまんが・アニメーション・映画等の日本による宣伝工作を明らかにしていきたい。

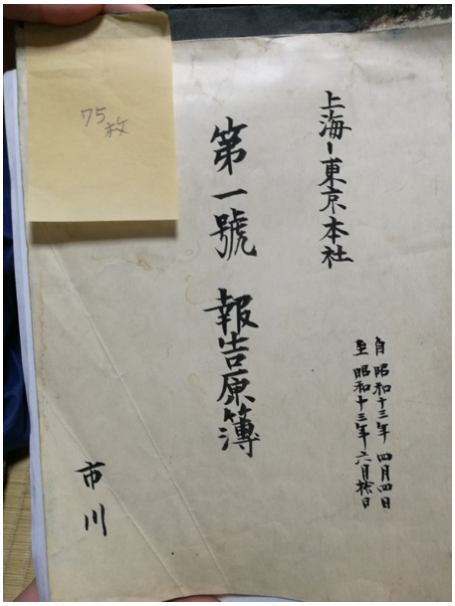

図4　東宝・陸軍による中国映画工作資料

東アジア分科会では、大塚・蔡錦佳・鈴木麻紀らによって、**まんが「翼賛一家」の調査研究**も進んでいる。これは、昭和15年12月から大政翼賛会が「版権」を管理して「朝日新聞」「読売新聞」「大阪毎日新聞」などの主要新聞、あるいは『寫眞週報』『アサヒグラフ』などの主要週刊誌をはじめとする多メディアに複数のまんが家が同時掲載した**翼賛会主導のメディアミックス作品**である。(図5)

図5　「翼賛一家」告知記事(『朝日新聞』　1940年12月5日)

「翼賛一家」は朝日新聞がこのキャラクターを用いた投稿を呼びかけ、また、同じく人形劇では翼賛一家人形劇を人形から自ら作るマニュアルが冊子として刊行されるなど(図6)、翼賛体制が「素人」の「投稿」による参加型の動員を多様に行っていたことも確認できる。近衛新体制の「協同主義」は「翼賛一家」に象徴される「受け手」の参加によるメディアミックスを生んだのである。

このような「キャラクターや「世界観」を「版権」として管理して「投稿」を誘発する「メディアミックス」は、現在行われているメディアミックスのビジネスモデルと同一である。それは、「翼賛一家」が参加

型プロパガンダ用語として用いられた**「投稿」「協働（協同）」「世界観」といった「新体制用語」**が、現在のメディアミックスを論じる語となっている事実も含め、現在の起源としての戦時下に関わる問題でもある。それらが現在のクールジャパンとして発信されるイメージや言説と無関係とは思えないからである。いわば、**戦時下に展開されたクールジャパン政策**として、戦時下の「外地」「内地」おける大衆文化と宣伝工作の関係を批判的検証することが現代班の一つの主題である。

このようなメディアミックス研究や、読者の「投稿」による参加をオーディエンス論としてアプローチすることは北米のまんが・アニメ研究のトレンドとしてあるが、それら北米の理論先行の研究から欠落しがちな歴史研究によって現代班はそれらを批判的に発展させているという自負もある。

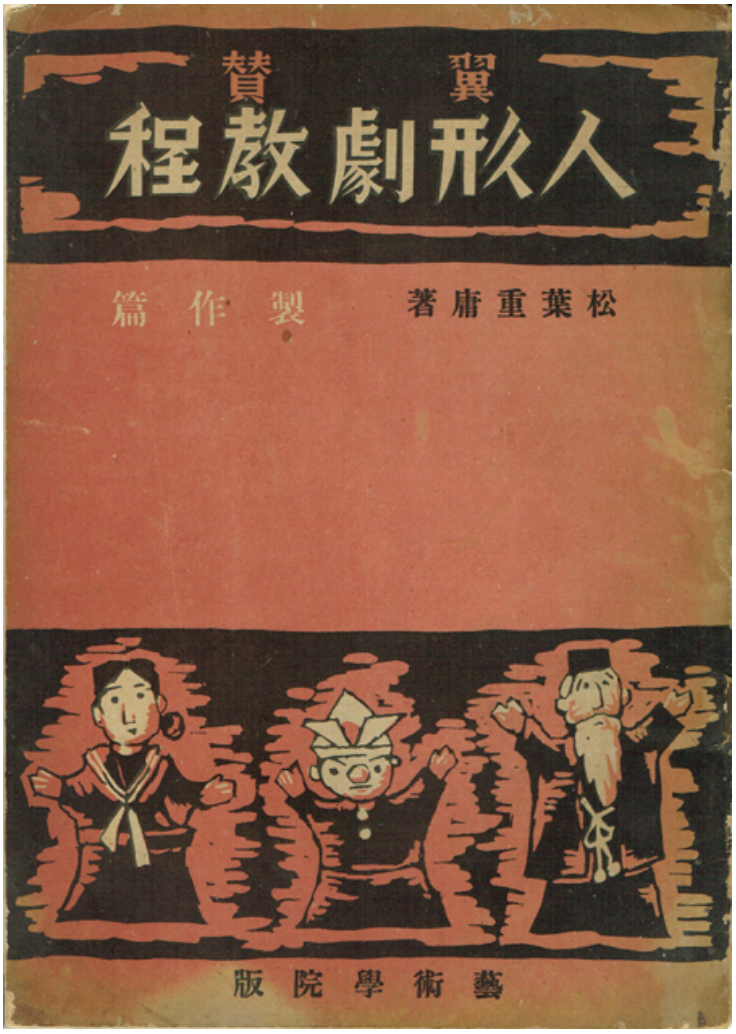

図6　松葉重庸著『翼賛人形劇教程　製作編』
（1941年、芸術学院）

「朝鮮写真絵はがき」山本俊介氏コレクションの日文研データベース紹介

朴美貞
立命館大学　非常勤講師
稲賀　繁美
日文研　教授

コーパスの概要と研究および作業経過

2010年は「日韓併合（1910年）」から100周年を迎え、日韓両国では様々な学術行事が行われた。その年に京都の「高麗美術館」でも特別企画展として「朝鮮風俗絵葉書」展が設けられていた。この企画展は、当時当館の学芸員山本俊介氏の朝鮮写真絵葉書コレクションを中心にいくつかの朝鮮絵葉書所蔵先の協力を得て実現された。朝鮮写真絵葉書特別企画展を回覧して、その数の多さ、ジャンルの多様性、歴史的史料としての価値を改めて痛感した。それまで写真絵葉書の存在は、研究者のあいだでは知られていたが、各自の研究に必要なものをつまみ食いする程度の利用にとどまっていたのが現実であった。あえて言えば、古本店主や一般の絵葉書マニアたちによって趣味や商品価値の対象としてその価値が保たれてきたもの、と言わざるを得ない。

丁度、そのころ日文研でも帝国日本とアジアに関する研究に重点が置かれ、日本が領有した旧アジアの諸地域に関する画像資料を幅広く旺盛に取集する体制が整った。当時、日文研で研究員として所属していた朴美貞は共同研究会を主催する稲賀繁美教授と高麗美術館を再訪し、山本俊介氏のコレクションを整理してスキャンと目録化し、データベース化に関する相談を持ち掛け、山本氏本人の承諾を得て2018年3月に作業を終え、これがデータベース化されて公開されるに至った。

同時に朴と稲賀を主催者とする科研研究費補助金による「非文字資料」研究の関係者をはじめ、日本国内の古書店主や絵葉書研究家たちを中心メンバーとする「絵葉書研究会」を立ち上げ、写真絵葉書や画像資料収集に携わる関係者とともに何度もの研究会を重ねてきた。写真絵葉書それ自体を学術的史料として取り上げ、それらの分析・保存・資料さらにその活用をいかに進めるかをめぐって、有意義な議論が積み重ねられた。

写真絵葉書の趣味愛好家・関係者の中では「日文研のおかげで写真絵葉書が注目され、その価値も評価されました」とのお話も聞かれるようになったほどであった。研究者の間でも「非文字資料」をめぐる研究への関心が高まった。21世紀ゼロ年代当時のこのような流行は国内だけにはとどまらない。韓半島にあってもまた、写真絵葉書を始めとする「非文字資料」収取・調査研究への熱が高まった。競売売立てでも「朝鮮」関係の写真絵葉書などの資料が、アジア関係資料の中で一番値が高く、現在もその勢いは冷めることを知らない。

朝鮮絵はがき写真の沿革

朝鮮写真絵葉書が、日本を軸に大量に生産されるのは、日清戦争以後を起点とする。それまでは、写真撮影も「東洋」の各地に散在していた。日本よりさらに強固な鎖国を守ってきた朝鮮がカメラに収められるのには、欧米の商船による貿易取引が契機となった。1852年の清国への外交使節、すなわち「三節年貢行」の一行が1863年北京のロシア公使館でロシアの写真師によって撮影されている。その肖像写真を、イギリス人宣教師（William Lockhat　1811~1896)が本国に持ち帰った。これが欧州における朝鮮写真の沿革とされる事例となる。

「大航海時代」以来、東洋の存在は、西洋社会でも認知されていたが、19世紀のジャポニズムの時代を迎えるまでは、なおどちらかといえば十把ひとからげの「東洋」観が蓄積されてきたに過ぎない。だが写真技術の発達とともに、「東洋」は別の媒体によって、異なる意味を込めて転写（グラフィックgraphic）され、それまでの情報とはかけ離れた物語を生み出す切っ掛けともなった。極東体験を紹介する冊子をはじめ、近代文明を伝播する万国博覧会の広報や記録物、極東の調査報告書や個人の旅行記に至るまで、様々な媒体の中に写真複製は散見できる。陶磁器などの商品見本の挿絵写真が最も多く、書物など紙媒体としては、欧米で開かれた万国博覧会の宣伝物や記念写真帖等などが知られる。展示物情報には間違いも多く、着物姿の女性が中国女性に、日本女性の髪形に中国服装、日本のお茶道具を持つ中国服装の女、人物をめぐる個人情報の間違い等、ごちゃまぜの東洋像も散見できる。

<リービッヒ会社の広告ポスターの中、朝鮮イメージ>：京城の南大門通りの写真風景を基に朝鮮の女性の姿は東南アジアの風俗人物が付け加えられている>

<19世紀、肉エキスのスープの素を大ヒットさせたイギリスの食品加工会社の名前で、　発明者のドイツ人化学者 フォン・リービッヒに由来。リービッヒ・カードは、おまけカード（　広告カード）として1867年からおよそ100年間にわたりさまざまなテーマで発行されていた>

朝鮮写真と日本

朝鮮が近代的外交関係を結んだのは、１８７６年「日朝修好条規」を画期とする。その外交事例の始終が、同行した写真師によって詳細に記録され、後に使節一行にお土産として渡された。この時期以降、朝鮮の開港地における日本人居留地に写真館が設けられ、写真師の活動を通して、朝鮮の情報や風俗などがカメラに収められるようになった。日本人入植者たちは、居留地を獲得していく中で、かつての西洋が持っていた東洋への眼差しを自らに適用し、近隣のアジアを「他者」なる「東洋」として見つめていく。「帝国化」の進行とともに、領有地のあらゆる情報は、帝国の知（力）として蓄積されてゆくとことなる。

日本で写真絵葉書の生産と流通を拡散させ、その発展を促進したのは、日清・日露戦争であり、朝鮮写真絵葉書が量産されるのも日清戦争以後である。それは、近代的郵便制度の定着、戦地に赴いた従軍記者団の活躍と印刷技術の向上によって可能となった。従軍記者団のカメラマンたちは、戦況だけではなく、戦地（外地）の風物・風俗も多く収め、多くの写真を本国に転送した。戦地の原風景や風俗は写真銅板に応用され、それらのイメージが他の媒体にも転用された。特に大衆向けの情報誌は、戦争を伝える文章とともに写真複製を掲載することにより、記事の時事性と視覚性を高め、読者層を広げていた。

日清戦争後、従軍写真記者団の中には、そのまま朝鮮や戦地に留まり写真館を設けた人物も現れる。かれらは現地人や風俗・風景などをカメラに収めては、写真絵葉書にして販売する。私製写真に加えて、20世紀に入ると官製はがきの使用も始まる。朝鮮や日本国内では、新しく日本に「編入」された「朝鮮」情報の共有とともに、異国情緒への憧憬も広まった。

当時の京城では「御用」写真師もいて、貴族や中流階級をお客とした。特に美しい「妓生」の存在は日本人写真師にとり格好の商品価値ともなった。写真師のモデルになった彼女らの姿は「朝鮮お土産」絵葉書の重要品目になり、異国朝鮮への欲望を挑発する存在となる。

<京城で写真館を構えた日本人写真師による若い官妓の姿>

そのような朝鮮イメージの生産と流通の中心にあったのが、当時の京城本町二丁目にあり、朝鮮の風俗写真絵葉書の製造と販売の大手商社となる「日之出商行（商会）」であった。

<当時の京城本町二丁目にあった絵葉書の制作販売の大手商社「日之出商会（商行）」>：お店のガラスウィンドーから商品を見物している和風姿の男性とお店の角に置かれているポスト箱」

そのなかでも看過できないのが「日韓併合記念絵葉書」であろう。これは、1910年の日韓併合の勅書の発布を日韓人が確認し、互い喜ぶという場面。古代の征韓論の神功皇后、中世の朝鮮進出の秀吉の肖像、征韓論を唱えた西郷隆盛（1828-1877）、古代以来、日露戦勝に至るまでの歴史を俯瞰し、念願の末にようやく朝鮮を領有するに至ったことを公表し、統治にあたって韓国のことを充分に知るべきことにも意を用いている。「日韓両国に尽くした伊藤博文を銃で撃ち殺すことのできる朝鮮人」すなわち安重根のイメージをも並列することで、帝国臣民に朝鮮人への警戒を促すのも、それゆえだろう。「韓半島の経営論」を支える朝鮮に対するまなざしは、朝鮮支配の全時期を通して通底していた。

朝鮮総督府による統治の全時期を通して生産された朝鮮イメージ　は、画報や絵葉書、国定教科書など、様々な媒体にも転用されていく。朝鮮で行われた施政記念行事 をはじめ、特産品や新しい文物を 紹介する万国博覧会（物産会、品評会等）、歴史的史蹟、産業、政策の奨励やその成果を表した統計、都市の風景等が植民地に関する研究調査、学習材料、施政記録の一環として、これらの写真情報も蓄積された。他方では、これらの朝鮮写真絵葉書は、観光地の土産店、博覧会会場などで、土産品として販売され、広く世界に行き渡っていった。

日文研データベース所収の『朝鮮写真絵はがき』は、日本の帝国としての歩みの貴重な記録であり、一方では朝鮮を始め、かつてのアジア植民地の歴史的遺産でもある。埋もれている過去の歴史的図像資料として、日本とアジア近隣諸国との間になお横たわる歴史認識のズレを検証し、その落差を直視しつつ、相互対話の欠落を埋め合わせる史料として、十分な学術的価値を発揮することが期待される。そのためにも、史料としての価値、その活用をめぐる多様な議論が今後、このデータベースをもひとつの起点として展開されることが、求められる。

お知らせ

活動予定

大衆文化研究プロジェクトでは、夏から秋にかけて、次の展覧会事業に取り組んでいます。

・日文研の妖怪パネルで遊ぼう―国際日本文化研究センターの活動紹介と妖怪パネル展示

平成30年7月6日（金）-18日（水）、大阪市立中央図書館１階エントランスギャラリーにて開催。日文研の活動内容と、所蔵する貴重な妖怪画像資料をパネルと複製物（レプリカ）で紹介します。

・日文研所蔵 吉田初三郎鳥瞰図コレクション展（仮）

今秋、劉建輝副所長・石川肇助教の企画により、大阪市立中央図書館において、吉田初三郎鳥瞰図コレクションを所蔵資料を中心に紹介する展覧会を開催します。

・「日文研コレクション 描かれた「わらい」と「こわい」

京都・細見美術館にて「日文研コレクション　　描かれた「わらい」と「こわい」展ー春画・妖怪画の世界ー」を開催します（2018年10月16日～12月9日）。日文研が25年以上かけて収集してきた春画・妖怪に関する資料（絵巻、浮世絵、おもちゃ絵など）を広く一般に向けて公開します。その他にも、春画復刻事業による復刻作品も展示する予定です。

機関拠点型基幹研究プロジェクト
大衆文化の通時的・国際的研究による
新しい日本像の創出

大衆文化研究プロジェクトニューズレター

No.02_2018

タイトルデザインの図版の原典は左からの順で以下の通りです。

1)「福冨長者物語」
神谷詮敬（1775年写）日文研所蔵

2)「百鬼ノ図」
伝土佐光吉（1539-1613）日文研所蔵

4) 墨池亭黒坊 (1908年)「一心同躰切ッても切れぬ中」他、「絵葉書世界」第14号より、日文研所蔵

5) 山路亮輔 (2015年)「縦スクロールまんが」より

大衆文化研究プロジェクトニューズレター
（No. 2：2018 年07月13日発行）

発行：国際日本文化研究センター
　　プロジェクト推進室

前川　志織　特任助教
木場　貴俊　プロジェクト研究員
アルバロ・エルナンデス　プロジェクト研究員

〒610-1192京都市西京区御陵大枝山町3-2
tel: 075-335-2079
fax: 075-335-2090
e-mail: taishu_staff@nichibun.ac.jp
http://taishu-bunka2.rspace.nichibun.ac.jp/